

平成19年7月の解説（週間天気予報）

【7月の天候状況】

月の前半は梅雨前線や低気圧の影響でほぼ全国的に雨や曇りの日が多くなりました。月半ばに、台風第4号が南西諸島から日本の南岸を進んだため、全国各地で大雨が降りました。その後は北日本や東日本では月末まで梅雨前線や低気圧の影響で曇りや雨の日が多くなりましたが、西日本では下旬半ばから太平洋高気圧に覆われて晴れる日が多くなりました。南西諸島では月を通して太平洋高気圧に覆われて晴れる日が多くなりました。

月を通しての日照時間は北日本の日本海側と南西諸島では平年より多く、その他の地方では平年より少なくなりました。降水量は南西諸島、西日本、東日本太平洋側で平年を上回り、北日本と東日本日本海側で平年を下回りました。気温は南西諸島を除いてほぼ全国的に平年より低く、南西諸島では平年より高くなりました。

【7月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7日目の平均）は全国平均では例年（注）より1ポイント高い66%でした。北陸地方では8ポイント、近畿地方では6ポイントそれぞれ例年より低く、北海道、九州北部、九州南部、沖縄地方では7から13ポイント例年より高くなりました。最高気温（2～7日目の平均）の予報誤差は関東甲信、近畿、中国地方で0.3から0.5℃小さく、全国平均は0.1℃小さい2.5℃でした。最低気温（2～7日目の平均）の予報誤差はほとんどの地方で例年より小さくなりました。特に北海道、東海、北陸、中国地方で0.4から0.5℃小さく、全国平均では例年より0.3℃小さい1.5℃でした。

（注）例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【7月の週間天気予報から】

7月8日に発表した東京地方の週間天気予報では10日から15日まで全ての日に雨が降ると予報しましたが、13日だけは雨が降りませんでした（図1）。

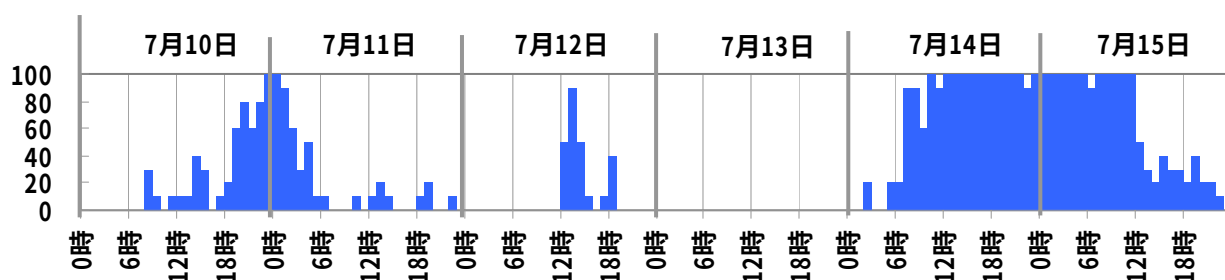


図1 東京地方の全観測点のうち1時間に1mm以上の降水を観測した観測点の割合(%)

図2の上段は8日発表の予報に使用した予想気圧配置です。12日から14日まで共通して、オホーツク海高気圧と太平洋高気圧に挟まれた気圧の低い部分が日本の東海上にあって、

て、降水域を伴って西日本に向かって伸びています。このことから、梅雨前線が日本の南岸に停滞することが予想できます。また、台風第4号は12日には沖縄近海、13日には東シナ海、14日の位置は不明瞭ですが、九州から東日本にかけての気圧が低い部分のどこかに進むことが推定できます。

以上の梅雨前線と台風の動向から、東京地方では13日までは梅雨前線による雨が降り、14日から15日にかけては台風の接近及び通過による雨が降ると予想しました。

実際の気圧配置（図2の下段）と予想図を比較すると、13日の台風の位置が予想より九州に近づいていること以外は予想図と概ね一致していますが、台風や梅雨前線の詳細な位置や梅雨前線の活動が活発な部分（北に盛り上がった部分）などは予想図では特定できません。12日には梅雨前線の活動が活発な部分が関東南部を通過して東京地方も広い範囲で雨となりましたが、通過後の13日には梅雨前線がやや南下し活動が弱まったため、千葉県や神奈川県沿岸部では雨が降ったものの、東京地方では雨が降りませんでした。

梅雨前線付近では雨が降り易くなりますが、前線に沿って一様に降るのではなく、前線活動の程度や、梅雨前線の南北への微妙な変動に大きく左右されます。数日前に発表する週間天気予報で、梅雨前線の位置や前線活動が活発化する部分を正確に予想することは難しいことです。

【9月の週間天気予報の利用にあたって】

太平洋高気圧に覆われる日が多い8月に比べて、9月は低気圧や前線が日本付近を通りやすくなります。低気圧が発達しながら通った後には、北の冷たい空気を持った移動性高気圧に覆われるため、晴れても日中の気温は8月ほどには上がりにくくなります。また、晴れた夜は放射冷却現象の効果が強まって翌朝の最低気温が下がりやすく、内陸地方の特に盆地で顕著になります。夏の暑さから開放されて過ごし易くなりますが、暑さになれた身体にとっては、急激な気温の変化は体調を崩す原因ともなります。週間天気予報では、天気他に最高気温、最低気温の予報も行っていますので、体調管理などの参考としてもご利用下さい。

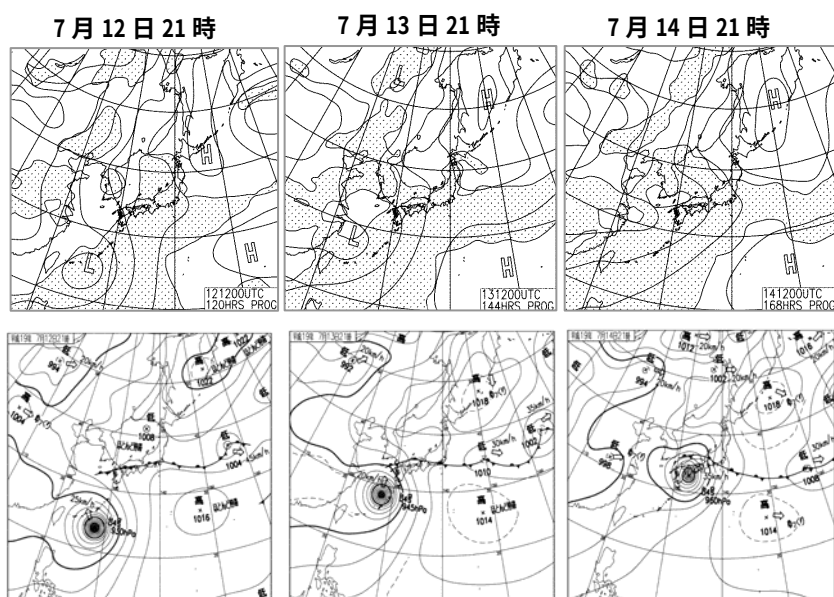


図2 7月8日に予想した12から14日の気圧配置：ハッチは降水が予想される範囲（上段）と実況地上天気図（下段）